

石川県立美術館だより

平成18年7月1日発行 第273号

矢野 倫真

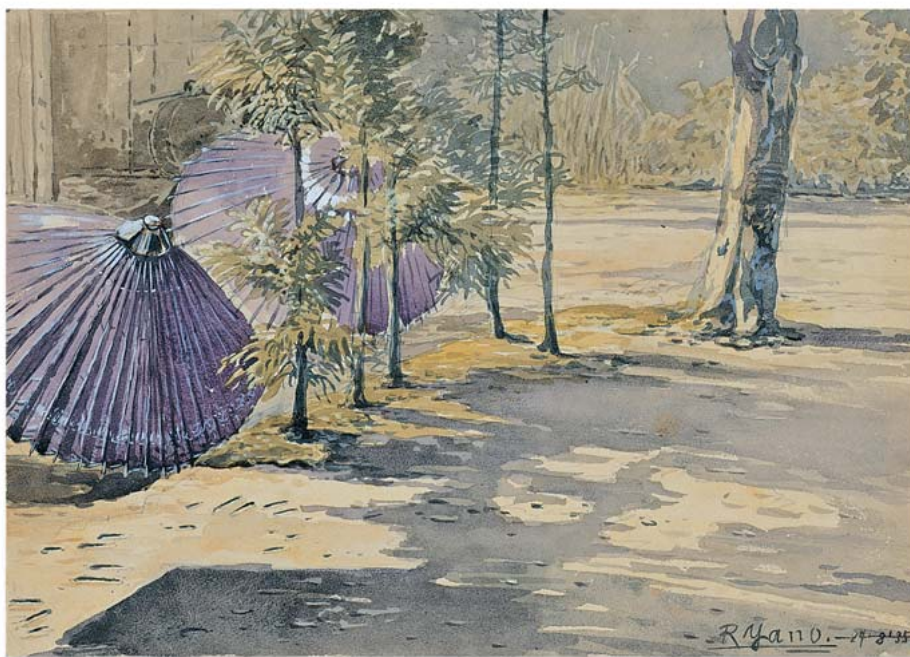
- 水彩画の黄金時代 -

6月22日(木)~7月17日(月・祝)
会期中無休

古九谷名品選



色絵鳳凰図平鉢



矢野倫真 和傘のある庭

目次

甲冑と陣羽織 後期	2	今月の企画展示室	6
古九谷名品選	2	第3回美術館バスツアー報告	7
矢野倫真展、鑑賞ファイル	3	7月の行事案内	7
主な展示作品	4	所蔵作品紹介	8
展覧会回顧(UKIYO絵展)	5	移動美術展、次回の展覧会	8

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

今月のコレクション展示室
(前田育徳会展示室)

特集

甲冑と陣羽織(後期)

6月22日(木)~7月17日(月・祝)

後期には、甲冑、陣羽織、鞍、加賀象嵌鏡、石目筒(鉄砲)などを展示します。その内から、すばらしい意匠が多い陣羽織を紹介しします。
藤手文陣羽織

この陣羽織は五代藩主綱紀所用で、明るい黄羅紗に裾に紅羅紗の藤手文を切嵌技法で配しています。藤手文を横にして、左右均整の配置となっていて、波の表現のようにも見え、洒落て藤波とも呼ばれています。黄と赤の明快な色調と簡素な意匠構成による袖無の陣羽織で、形にも意匠にも装飾のための装飾を排して、簡素な中に美を求めた綱紀の好みを表したものと思われまふ。

日の出に立波文陣羽織

この陣羽織は六代藩主吉徳所用で、肩が張り、腰の線がくびれ、裾に開くいわゆる日に似た形で洗練された美しいフォルムです。

日の出に立波の意匠は、
絵画や工芸品にも多い意匠ですが、武將の着る陣羽織にはまことに相応しいものと思われまふ。前田家歴代がそれぞれ表地の色を替え、若干の修正を加えながら踏襲しているものです。黒羅紗地に赤と白の羅紗で日の出と立波が切嵌技法で仕上げられており、その色彩の配置は簡潔で見事です。切嵌は小さな波しづきまで、羅紗地の厚みの中に縫糸が隠され、表裏ともに縫目を見せない精巧な手仕事です。

石川県は、伝統工芸の盛んな地域として広く知られていますが、なかでも「九谷焼」は、その代表的な美術工芸品として今日も盛んに生産されています。

九谷焼は、江戸時代のはじめ、加賀国江沼郡九谷村(現在の石川県加賀市九谷)において、初めて焼成されたので、その地名から九谷焼という名称がつけられています。その九谷焼のなかで、もっとも早い時期に焼成された色絵磁器を「古九谷」と称しています。

古九谷は、明暦から宝永の頃(一六五五~一七一〇)、山中温泉から大聖寺川を十三キロあまり上流に遡った九谷の地で焼成されました。文献によれば、加賀藩の支藩であった大聖寺藩の藩窯として始められたものとされています。藩主の命を受けた後藤才次郎は、肥前有田へ陶業の技術習得のために遣わされ、帰藩後、九谷の地で窯を築き、その指導のもとにできたやきものが九谷焼の始まりです。

古九谷古窯の発掘調査は、昭和四十五年より五次にわたって行われ、昭和五十四年には国の史跡に指定されています。

古九谷の色絵技法をよく見ると、呉須の線描の上に、絵具を厚く盛りあげるような方法をとっていることがわかります。この場合、呉須の線描は輪郭線を表現するための役割をあまり果たしておらず、絵具は線描をはみ出し、さらには線描を塗りつぶしているように見えます。上に厚く盛られた透明感の高い絵具との重なりによって、それは独特の効果を発揮しています。上に盛られた絵具によって、緑の絵具が黒に、黄色の絵具は紫、紫の絵具はこげ茶の色に見える効果があり、多くの色を感じさせる役割を果たしているのです。

今回は久方ぶりに第2展示室全室で、「古九谷」の優品を展示します。豪放華麗な名陶の美しさをどうぞご堪能ください。

今月のコレクション展示室
(第2展示室)

特集

古九谷名品選

6月22日(木)~7月17日(月・祝)



口青手樹木図平鉢



口色絵鶉草花図平鉢

今月のコレクション展示室 (第3展示室)

特集 矢野 倫真 —水彩画の黄金時代—

6月22日(木)~7月17日(月・祝)



秋日和 明治34年

いまよみがえる美しき日本の情景

明治二十年代から三十年代にかけて、画家・美術教師として各地の風景・風物を見事な筆致で描いた矢野倫真（やのりんしん 1864-1903）の水彩画を初公開します。

矢野は元治元年、加賀藩・本多家家臣の家に生まれ、明治十九年、京都府画学校で西洋画を学んだ後、美術教師として富山県、愛媛県、京都府、岐阜県の各中学校を歴任し、かたわら水彩画を描き続けました。これらの作品が描かれた明治三十年代は、日本の水彩画の黄金時代ともいべき時代で、丸山晩霞、大下藤次郎、三宅克己等の水彩専門の画家が活躍しました。矢野の作品はそれらと同質の高い水準を示すものです。

当館はこれまで本県の洋画家を調査し、その結果を「石川洋画のあけぼの 戦前までのあゆみ」、「石川洋画のあけぼの 幕末明治編」の二つの展覧会に示してきましたが、その際、矢野倫真の名は記録に残るものの作品は不明で、紹介することはできませんでした。

今回、二百点を優に超える矢野の水彩画が矢野家で発見され、しかもこれまで陽にさらされることはなかったのでしょうか、とても鮮やかな色彩を見せています。百年前の美しい日本の風景・風物をこの機会にぜひご覧いただきたいと思えます。

経歴

元治元年（1864）加賀藩・本多家家臣小竹家に生まれる。五歳の時本多家家臣矢野家の養子となる。明治十九年京都府画学校西宗（西洋画科）に入学、関西洋画の祖・田村宗立に師事。二十一年卒業。同年三月に富山県尋常中学校、二十二年十一月愛媛県伊予尋常中学校、二十六年八月京都府尋常中学校、三十四年七月岐阜中学校に赴任、以降昭和五年まで岐阜中学校に在任。岐阜洋画研究会を主宰し、洋画の普及に努める。十八年岐阜県にて死去。

鑑賞ファイル No.6

水彩画と水彩絵具

一枚の紙の上に、鮮やかな発色と透明感を持って描かれる水彩画。その独特の発色や透明感を出すことをできるのが、水彩絵具の特徴といえます。

水彩絵具、水彩画の起源は古く、紀元前のギリシャ時代にまでさかのぼるともいわれます。しかし、一般的に水彩画といわれるような表現は、ドイツルネサンスの巨匠デューラー（1471～1528）などから見られるようになりました。

さて、現在のような水彩絵具ができあがったのは、いつ頃からなのでしょう。水彩絵具の成分は、顔料とアラビアゴムやグリセリンなど水溶性の媒質です。中でも絵具の保存性を高めるグリセリンは、18世紀にイギリスで発明されました。それが、ヨーロッパ本土よりイギリスで水彩画が飛躍的に発展した理由の一つと

いわれ、W・ターナー（1775～1851）やP・サンドビー（1725～1809）などの優れた水彩画家を輩出しています。

水彩画を日本に本格的にもたらしたのもイギリス人です。安政6年にロンドンニュースの美術記者として来日したチャールズ・ワグマンに高橋由一や五姓田義松などが師事しました。

当時の絵具は「皿入り絵具」や、顔料を棒状に固めた「色墨」といわれたもので、今のようなチューブ入りの国産絵具は明治42年に登場したといわれています。

倫真はどんな絵具を使っていたのでしょうか？



今月のコレクション展示室 主な展示作品

6月22日(木)~7月17日(月・祝)

= 国宝 = 重要文化財
= 石川県指定文化財

前田育徳会展示室

特集 甲冑と陣羽織(後期)

- 黒塗六十二間甲冑
- 日の出に立波文陣羽織
- 五岳文字に雲文陣羽織
- 黒鞆革包総角文時絵鞍しほかわつみあけまきもん
- 葵花菱文銀象嵌鐙
- 三代利常所用
- 六代吉徳所用よしのり
- 十一代治脩所用はらむね
- 加州住永国作

第1展示室

- 色絵雉香炉
- 色絵雄雌香炉
- 野々村仁清
- 野々村仁清
- 野々村仁清

第2展示室(古美術)

特集 古九谷名品選

- 青手老松図平鉢
- 色絵布袋図平鉢
- 色絵鶏草花図平鉢
- 色絵鳳凰図平鉢
- 色絵鶴かるた文平鉢
- 青手樹木図平鉢
- 青手桜花散文平鉢

第3展示室

特集 矢野倫真 | 水彩画の黄金時代 |

いまよみがえる美しき日本の景色
水彩画45点を展示します。

第4展示室(油彩画、彫塑)

【油彩画】

- ナザレのおばさん
- 花模様の上の裸婦
- 竜の八ナ短
- 連理
- 鴨居 玲
- 東 典男
- 庄田常章
- 脇田 和

【彫塑】

- 女ポテテル
- 青年像
- 夏
- 畝村直久
- 坂 坦道
- 得能節朗

第4展示室(工芸)

- 色絵壘栗大飾皿
- 友禅訪問着「あじさい」
- 双鳩之図手箱
- 砂張三象花入
- 木彫戩金彩色「匂鳥」
- 富本憲吉
- 木村雨山
- 寺井直次
- 初代魚住為楽
- 西出大三

第6展示室(日本画)

- 夏目
- 蓮
- 静映
- クヌール崩壊
- カルナック遺跡
- 稲元 実
- 浜出青松
- 平桜和正
- 里見米庵
- 金曾大畔

その他油彩画も展示します

観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



夏目 稲元 実



女ポテテル 畝村直久



連理 脇田 和

展覧会回顧

県美スペシャル

広重・北斎・歌麿 UKIYO 絵展

本館に新たに収蔵されることになった「浮世絵」を初公開した今展でしたが、耳馴染みのある「浮世絵」の展覧会とあって、多くの方々に足をお運びいただきました。本当にありがとうございました。一点一点じっくりと、覗き込むように鑑賞される方が多く、それぞれに浮世絵の技の細かさ、模様の美しさに魅了されている様子でした。何時間も展示室にいらっしゃる方、日を改めて再度鑑賞に来られた方、遙々遠方よりお越しくださった方も見受けられ、改めて「浮世絵」人気を実感しました。

会期中の関連事業も盛況でした。江戸東京博物館の小澤弘教授による講演会をはじめ、美術講座、ギャラリー・トークなど、会場は毎回「浮世絵について、もっと知りたい!」という人々の熱気で溢れていました。特に、会期中の土日に6回行った摺りの実演会には、いずれも70名以上、時には100名以上もの方々がお集まりくださいました。幾度にも渡る摺りの行程をじっくりとご覧いただいただけでなく、用いる道具にも触れ、その後の展示室では、「なるほど、浮世絵には木目が見える」「版木の凹凸がわかる」と、浮世絵制作の形跡を発見される方も多くいらっしゃいました。

会場に設置しましたアンケートには、多くの方々にご回答くださいました。ありがとうございました。毎日、拝読するのを楽し

みにしておりました。概ね「作品も多く、大変よかった」「素晴らしいコレクションでした」というご感想を頂戴しましたが、中には「多すぎて、疲れた」という方も。解説文については、「わかりやすかった」というご意見の一方、「もう少し詳しい解説文が欲しかった」「戯画や滑稽画がわからない」というお声もありました。「展示では概要を、詳細は講座やギャラリー・トークで」と分けて考えていたのですが、個別にももう少し詳しい解説文を附してもよかったのかもしれません。いただいた皆様からのご意見を尊重しつつ、常によりよい展示を心がけて参りたいと存じますので、今後もご理解とご協力の程、お願い申し上げます。

「久世さんのコレクションをもっと見たい」というご意見も、当然の如く多く寄せられました。今後は二階のコレクション展示室にて展覧の予定ですので、楽しみにお待ちください。



ミュージアムレポート

キッズ☆プログラム 鑑賞講座 「近代版画を鑑賞しよう」

小学生を対象とした鑑賞講座が今年度も開講しました。5月6日(土)、「近代版画を鑑賞しよう」と題して近代版画を中心としたコレクション展示室を鑑賞しました。

企画展示室ではUKIYO絵展を開催中で、浮世絵の複製や、鑑賞講座に先立って行われた体験講座で制作した作品や見本の多版多色木版画で版画の制作手順や表現のいろいろを確認してから展示室へと向かいました。「この部分きらきらしてるよ」「襟の模様のところがでっぱってる」「蛍の光がきれい、夜だね」等たくさんの感想が飛び出しました。子どもたちの鋭い視線をたくさん浴び、版画の中の女性たちも戸惑っていたかもしれませんね。

今回の鑑賞講座は7月1日(土)「矢野倫真水彩画を鑑賞しよう」です。この機会に私たちとたくさんの美術に親しみましょう。



天正11年(1583)加賀藩祖前田利家が金沢へ入城したその時期に合わせて、前田家歴代藩主所用の甲冑と陣羽織を展示していますが、本年は初代藩主利家所用の重文 金小札白糸素懸威胴丸具足を平成14年の「利家とまつ展」以来4年ぶりに展示しての利家小特集を企画いたしました。

それで最初に、賤ヶ岳の合戦以後の天下の状勢、小牧・長久手の戦いと連動しておきた北陸版小牧・長久手の戦いともいえる末森合戦の関係資料等を解説しました。その後、当世具足発生の経緯、陣羽織の歴史を解説し、加賀具足の特徴、具足にこめられた各工芸技術の特色、見所、陣羽織にみられる意匠のすばらしさ、切嵌技法などの優れた手業などについて解説しました。甲冑各部の名称、甲冑の重さ、実戦に使うために作られたのか等々の質問が出されました。是非この機会にご鑑賞下さい。

ギャラリートーク
「甲冑と陣羽織」

7月の企画展示室

石川示現会

7月7日(金)～7月10日(月)第7展示室

石川県立美術館に於いての「石川示現会展」も今回で3回目となります。

日展傘下の(社)示現会は昭和22年(故)榎原健三(故)大内田茂土の両芸術院会員を中心に31名の創立会員により結成され、今年4月に東京都美術館で第59回展が開催されました。今般私達示現会石川出品者協会の20数名は、本年の出品作品を中心に一人2点の大作(50号～100号)を発表し、広く県民の美術愛好者の鑑賞をいただき、ご批評を賜りひとり一人が努力と研鑽を重ねてゆきたいと思っています。又そのことにより地域文化の発展に寄与できればまことに幸甚なことと存じます。

ご承知の通り示現会の絵画は写実を中心の作品で、理解され易く多くの人達より好評を得ています。私達の仲間も年々増加し、近い将来には石川県支部の結成も予想され益々の発展を期待しています。

◇入場無料

◇連絡先

野々市町太平寺2-47

示現会石川県出品者協会代表 神田直次

☎076-248-8186

第20回日本新工芸石川会展

7月13日(木)～17日(月・祝)第7展示室

日本新工芸家連盟は、工芸の原点を見つめ、個々の作家が素材をいかし技術を駆使して、現代に望まれている生活と美との調和をテーマとして制作活動を続けています。石川会展も20回を迎えることが出来ました。会員一同、いっそうの努力を重ねております。今回は新工芸近畿会より選抜された染織作家約10名が出品いたします。より多くの方にご高覧、ご批判をいただきたいと念願しております。

◇主な出品作家

北出不二雄、高光一生、榎木莊平、原田実、戸出克彦、柴田博、向瀬孝之、川田稔、松本昭二、高光一雅、金田一司、瀧川千春、瀧川佐智子、伊豆蔵幸治、伊藤寿江、山道千種、川越美和

◇入場料

一般500円 大学生以下無料

当館友の会会員は、会員証提示により300円になります。

◇連絡先

金沢市宮野町74 戸出克彦

☎076-257-5951

漢字の成り立ちⅡ 一金文の世界展一

7月7日(金)～10日(月)第8・9展示室

紀元前1000年頃、中国周代に創られた青銅器の銘文の文字“金文”をテーマに、その発見と研究、歴史、金文の拓本、写真資料、青銅器も展示し、周代の封建制度と文字の関係をわかりやすく紹介する展示会です。この他中国側から金文書法作品20点、日本側から金文を現代アート化した書法篆刻作品約90点、合計約200点を展示。こうした企画は世界でも初です。

◇入場無料

◇連絡先

金沢市三口新町3-18-4

北枝篆会事務局 北室南苑

☎076-222-3624

第10回石川県日本画協会展

7月13日(木)～17日(月・祝)第8・9展示室

県内在住の日本画の作家を中心とした会員の、県内未発表作品による展示会です。各種公募展の枠組みや既存の概念にとらわれない自由な作品発表を目指し、会員それぞれが取り組んでいる日本画制作の研究・模索の発表の場、また研鑽の場ともなっています。ベテランから若手まで幅広い層にわたり、広く県内日本画家の作品および近年の活動を知る上で、絶好の機会となっています。

◇入場無料

◇連絡先

金沢市若松町45 柳橋広司

☎076-261-9602

各地の展覧会・・・7月

開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせください。

池田コレクション選抜展

7/31まで

石川県七尾美術館

(七尾市 ☎0767-53-1500)

ルーヴル美術館展

8/10まで

東京藝術大学大学美術館

(上野公園 ☎03-5777-8600)

国宝 鑑真和上展

8/20まで

北海道立近代美術館

(札幌市 ☎011-644-6881)

世界ポスタートリエンナーレ トヤマ2006

8/10まで

富山県立近代美術館

(富山市 ☎076-421-7111)

生誕120周年 藤田嗣治展

7/23まで

京都国立近代美術館

(京都市 ☎075-761-4111)

エルンスト・バルラハ展

7/17まで

山梨県立美術館

(甲府市 ☎055-228-3322)

第3回 美術館バスツアー報告



瑞龍寺にて

3回目となる今回のバスツアーは6月11日(日)前田家とゆかりが深い、高岡市の文化財や美術館などを見学しました。定員45名のところ、75名の応募があり、会員のみなさんの関心の高さを再認識いたしました。

最初の見学地は、高岡の町の基礎を築いた、加賀藩二代藩主前田利長の菩提寺・瑞龍寺で、平成9年に山門、仏殿、法堂が国宝に指定されています。ご住職から大変詳しいご説明をいただき、特別に狩野常信筆の「帝鑑図屏風」、雪舟筆「達磨図」、織田信長書状、豊臣秀吉書状を公開していただきました。

瑞龍寺のご住職には、ひき続き前田利長墓所までご案内いただきました。普段は閉門している墓所を開け、墓石や周りの燈籠まで詳しく説明があり、何度も瑞龍寺に足を運んでいる方も口々に、ここまで詳しい説明は初めてだと喜んでおられました。

そのまま隣接する前田利長墓所の廟守、繁久寺へ。回廊の壁面いっぱいには並ぶ五百羅漢は壮観でした。

昼食を終えて、高岡市美術館へ。開催中の展覧会は、第45回日本伝統工芸展富山展。高岡在住で鍍金の人

間国宝、大澤光民さんから、展覧会概要の説明と、出品されている自作の説明がありました。続いて学芸員の方の解説とともに、常設展の特集「ものづくりのものがたり」を鑑賞。高岡の工芸史を子供向けに構成したこの展示は、大人にも充分楽しめました。

高岡市中心部から伏木へ再びバスで移動し、改修が終わったばかりの本堂が重要文化財に指定されている、勝興寺へ向かいました。ご住職からの説明をいただいた後、みなさんが「勝興寺七不思議」を一つ一つ、確認しておられました。

最後は高岡市万葉歴史館。大伴家持が国司として赴任したことから、高岡の伏木は奈良などに次ぐ、万葉の故地として知られています。ビデオを鑑賞し、研究員の方から特別展「天平万葉」についての解説がありました。万葉集にかかわる四季折々の草花を植生した庭も大いに興味を集めていたようです。

当日は天候にも恵まれ、参加者の方々のご協力により、鑑賞や移動も問題なく進行しました。この場をお借りして、お礼を申し上げます。

7月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月日	行事	内容	会場
7/1(土)	キッズ鑑賞講座	矢野倫真 水彩画を鑑賞しよう	講義室
7/2(日)	月例映画会	世紀末芸術 アールヌーボー(23分) ターナー 狂気をさそう風景画家(23分)	ホール
7/8(土)	美術講座	茶の湯の美 (高嶋学芸専門員)	講義室
7/9(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物20 謎の天平美人(34分) 正倉院宝物21 瑠璃の輝き(31分)	ホール
7/15(土)	美術講座	矢野倫真の見た風景 (二木学芸専門員)	講義室
7/16(日)	月例映画会	型染め 江戸小紋と長板中形(30分) 戦火をこえて - 紅型 - (25分)	ホール
7/22(土)	ギャラリートーク	若杉窯・吉田屋窯 - 古丸谷再興 - (谷口普及課長)	展示室
7/23(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物21 瑠璃の輝き(31分) 正倉院宝物22 不老長寿の夢(31分)	ホール
7/25(火)	キッズプログラム 鑑賞講座 夏休み親子で楽しむ美術館	第1回べたべた・ころころ スタンプ! 小学校1年(10:00~) 2年生(13:00~)	講義室
7/27(木)		第2回工芸に挑戦! 小学校3・4年生	講義室
7/29(土)		第3回日本画に挑戦! 小学校5・6年生	講義室

7月の全館休館日は18日(火)~20(木)です。

そうきゅうのずてばこ
双鳩之凶手箱

てらいなおし
寺井直次

大正元年(1912)～平成10年(1998)

昭和21年(1946)第1回日展

幅34.5cm×奥行28.0cm×高21.5cm

白く美しい、また凛とした二羽の鳩が蓋に表現されています。漆はもともとあめ色をしているので、白色を出すことは難しく、ベージュに近いやさしい色になります。作者は漆の加飾で白色の表現を可能にしたいと早くから感心を持ち、折にふれて卵殻を使用しての模索を怠りませんでした。この作品は卵殻による白色を主体にまとめて発表した第1作になります。

この作品では卵殻は大きめのものでまとめ、足やくちばしに厚貝を施し、目の周りの細かい表現など、鳩が大変力強く感じられます。また鳩とは対照的に側面の笹葉が、粗さや素材の違う粉やさまざまな蒔絵の技法で、アクセントの厚貝の露と共に優しく感じられます。

寺井直次氏は大正元年金沢市に生まれました。石川県立工業学校卒業後、東京美術学校に進学。卒業後は理化学研修所に入り金胎漆器の研究を行い



ますが、終戦後、金沢に戻り、作家活動を始めます。昭和21年第1回日展に入選し、以後入選・受賞を重ねますが、昭和30年に第2回日本伝統工芸展に入選、以後同展を中心に活躍します。金胎素地や卵殻を始めとした蒔絵表現について研究を重ね、昭和60年には蒔絵で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。平成10年没。

第5展示室で展示中

移動美術展のお知らせ

今年度は志賀町で開催

今年度の移動美術展は、志賀町で開催されます。志賀町ではかつて、平成6年に行われましたが、今年は、富来町との合併後はじめて開催するものです。今回は、日本画・油彩・素描・彫塑・陶磁・漆工・染織の各分野より、50点の作品を展示いたします。



インドネシアの女/南政善作

なかでも、志賀町出身の画家・南政善氏(明治41～昭和51)と白尾勇次氏(昭和2～)の作品は、複数まとめて展示し、あらためてそのすぐれた画業をご覧いただくと思います。そのほか、人物画に巧みな手腕を発揮した宮本三郎氏や高光一也氏、親しみのある風景を描いた西山英雄氏や藤本東一良氏、写実的な表現で動物をとらえた安嶋雨晶氏や吉田三郎氏など、多様なモチーフの表現の中にそれぞれの作家の個性を感じ取ることができましょう。さらに今回は、北出不二雄氏の陶磁器、寺井直次氏の漆器、堀友三郎氏の染織など、工芸作品もあわせて展示し、その魅力を堪能していただこうと思います。皆様のご来場をお待ちしております。

会場 志賀町文化ホール
 (羽咋郡志賀町高浜町力の1番地1)
 会期 7月2日(日)～9日(日) 会期中無休
 午前9時～午後7時(土・日は午後6時まで)
 入場料 無料

次回の展覧会

- 特集 婚礼調度の美(前田育徳会展示室)
- 特集 若杉窯・吉田屋窯
 一古九谷再興(第2展示室)
- 特集 夏休み 親子で楽しむ美術館
 にんげんがいっぱい。はいポーズ!
 (第6展示室)

7月21日(金)～8月20日(日)

休館日: 7月18日(火)～20日(木)

石川県立美術館だより 第273号
 2006年7月1日発行
 〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
 TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550
 URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>